



読書のまち・かわさき

通信 NO 4 4

読書のまち・かわさき

2009年10月9日

読書のまち・かわさき事業推進委員会／川崎市教育委員会 200-3243

小林豊さんとの対話 ～「読書の日のつどい」に向けて～

谷川俊太郎さんの『朝のリレー』という詩があります。



朝のリレー

カムチャッカの若者が
きりんの夢をみているとき
メキシコの娘は
朝もやの中でバスを待っている
ニューヨークの少女が
ほほえみながら寝がえりをうつとき
ローマの少年は
柱頭を染める朝陽にワインクする
この地球では
いつもどこかで朝がはじまっている
ぼくらは朝をリレーするのだ
経度から経度へと
そうしていわば交替で地球を守る
眠る前のひととき耳をすますと
どこか遠くで目覚時計のベルが鳴っている
それはあなたの送った朝を
誰かがしっかりと受けとめた証拠なのだ

この詩を教室でとりあげる機会があった日の翌日、小学6年生の児童が、「先生、谷川さんの詩ってこういうことを言っているのかもしれないね」と言いながら近づいてきました。片手には、『えほん 北緯36度線』という本を携えていたのを今でもはっきりと覚えています。絵本の内容は“ぼくたち”が“大きな鳥”に導かれて北緯36度線上にクラス人々に会う旅に出かけるというものです。同じ緯度にくらしながら時差があり、異なる文化をもち、多くの人が自分の町に訪れた朝を“ふつう”の朝だと思っているなんていう普段あまり意識していないことにふと眼差しを向けたくなる一冊でした。そして、この絵本の「旅」が中盤を越える頃、こんな一節に出会いました。“きっと大きな鳥はしているのだ。にんげんが、じめんに線をひき、その線をなんどもひきなおすことを。その線をこえて生きることの、よろこびを。”という表現です。そして、絵本の終盤“東と西がであう海。太陽は、ちょうどぼくたちのまうえだ。「こんにちは、たくさんのおもだち。」「いつかきっと、きみにあいにくよ。」という言葉に続いていきます。中東、アジアの旅をしながら、たくさんのおもだち、人と出あってきた作者小林豊さんだからこそ表現できる絵と言葉なのではないでしょうか。小林さんが書かれたように“にんげんが、じめんにひいた線”により、悲惨な戦争がおきているのも事実です。それでも、小林さんは“せんをこえて生きることのよろこび”という言葉によって希望の太陽に願いを託しているように思えました。そんなことについて絵本を紹介してくれた児童と対話したのをふと思い出しました。さて、この絵本の作者でもある日本画家、絵本作家の小林豊さんの絵と言葉、旅の話に出あえるチャンスが訪れようとしています。小林豊さんの講演会が、第7回「かわさき読書の日のつどい」で実現します。講演の題名は『わたしの旅と絵本』です。11月1日(日)午後2:00～4:30(開場1:30) 中原市民館ホールで開催される「かわさき読書の日のつどい」では、講演の他に「市内読書活動優秀団体表彰」「小林豊さんと小学生児童との交流」なども行われます。たくさんのご来場をお待ちしています。

小林豊さんプロフィール

日本画家。1946年、東京に生まれる。1970年代初めから80年代にかけて、中東・アジアをたびたびおとす。その折の体験が、作品制作の大きなテーマとなっている。著書に、『なぜ戦争はおわらないのかーぼくがアフガニスタンでみたことー』。絵本に、『せかいいちうつくしいぼくの村』『ぼくの村にサーカスがきた』などがある。

- ・ 市立図書館活動紹介
- ・ 読書ポスター作品
- ・ 読書標語
- 〓 会場展示 〓
- 「かわさき読書の日のつどい」

豊かな言葉のそよ風に包まれた全市ボランティア研修会

小風さちさん講演会

演題「お話の舞台裏～イギリス・韓国・ウクライナそして日本」

平成21年9月21日（金）、高津市民館の大ホールに豊かな言葉のそよ風が吹き渡り、訪れた人々はその風に優しく包みこまれました。

小風さちさんの多くの絵本の中でも「わにわに」のシリーズはよく知られています。絵本は文章が短いからこそ、作家の思いをよりしっかりと絵描きさんに伝え、互いの思いを一致させていくコミュニケーションによって創られていました。また小風さんは、シリーズを「子どもがどの本から読み始めても安心して読むことができる」ということを大切に考え、その一冊一冊が独立していることを念頭においているということでした。

「なぜわにが誕生したのか？」石神井公園にワニが出たと報道され騒がれその後関心が薄れ始めた時に、突然ワニの気配を感じたそうです。そして自分を媒体としてお話が自然に生まれてきたのだと、謙虚に話されました。お子さんを育てられていた小風さんは、子どもが乗り越えられないつらいことがあった時には、母親としてその思いを十分に受け止めるようにしてこられました。それが、お風呂の中でグューッとお子さんを抱きしめることだったのです。「ここに本物のワニが入ってきたらどうする？」そんな会話から、「わにわにのお風呂」のお話は誕生していきました。

「文章で一つの世界を構築するのに、リアルである必要はないが、そこにリアリティーがなかったら子どもは絵本を閉じてしまう。絵本を閉じてしまったら絵本の中でどんなに叫んでも声は届かない。リアリティーは自分の目や足を使って書く中でにじみ出てくるものである」という言葉に、読者に向き合う小風さんの誠実さが感じられました。知ろうとすることや語り継いでいく気持ちを新たにし、さらに多くの絵本を書いてこられました。また、作品の舞台が外国であることも、暮らしたり旅をしたりしていた小風さんには極めて自然なことでした。

「リアリティーのある絵本は揺るぎのない本物であり、親は物語の待っている世界に本物の橋を架ける大切な役目があります。その橋の前で子どもは自分で吟味し自分の足で橋を渡り冒険してまた帰ってきた時、子どもはその経験を足の裏で記憶するのです」という言葉には、子育てをする上で大切にしたい強くも広く温かな母親の心が感じられました。

小風さちさんの包み込むような声の温もりに心が癒され、絵本を通して子どもにどう向き合ったらいいのかを考えさせられた豊かな時間でした。

フロンターレと本を読もう



等々力競技場を本拠地に構える川崎フロンターレが、『フロンターレと本を読もう』という事業を開始しました。選手による本紹介冊子、しおりやポスターづくり、市立図書館における読み聞かせなどを行うようです。様々な年齢層の市民に、選手の新たな側面を知ってもらいたいというサポーターからの根強い声が、計画のきっかけだそうです。選手による本紹介冊子は、試合が行われる日の等々力競技場や市立図書館などで配布される予定です。

市立図書館では、選手が紹介する本のコーナーなども設けられる予定があるそうです。

ポスターには“kickoff 読書のまち”というキャッチフレーズが躍動します。

☆10月25日の等々力競技場、対広島戦において、競技場前に「移動図書館たちばな号」が登場します。そこではリサイクル図書や選手が紹介するお薦め本の販売なども行われます。